續近世畸人傳 二

2319

續畸人傳序

纘比年西遊未卜一枝巢居輙寓閑田廬主人適侵余之倦睡曲肱几上出續畸人傳者見眎余曰纘也西遊幾歷十有餘国拯山川之奇絶未見吉奇尋諸藩之畸人未遇吉畸然履跡所及法之麗不諸翁之畸人傳者乞又修此續篇

何生盛也主人笑曰足下見奇孤
不之奇遇畸人不之畸海內之廣
山川之奇不可勝舉方今文明之
盛況物遯世之人豈主鮮乎哉如
余固抵好奇以主不好反知近古
之負畸人所謂傍觀者明于當局
之類是耶足下索奇於千里之外
故見奇絕不為奇遇畸人不為畸
所謂觀海者不可語水之類是耶
可謂忘是一畸人也請以此語冒
此卷首何如纘諸之且曰余也空
勞步於海外有眼不見奇孤負識
不遇畸人不及翁之坐耕輩于閑
田廬也遠矣幸以斯語贖之不忘
可乎
寛政丁巳初夏

石見 浦世纘撰

浦世纘 浦世纘

續近世畸人傳目次

第一卷

卷顛子序　岡田子題言　六如子人橋氣性序

卷顛子攜画同人小傳

石門丈山　佐川田喜六　僧元政

佛庵佑吉　山口莊右衛門　美濃屋藤兵衛

心敬女　高戸喜七　馬市孫兵衛

第二卷

里村紹巴　本阿弥光悦　岡野左内

子安源八　原田長兵衛　鈴造寺平正

杉山檢校　角倉了以 羊悬玄之

能順　村上等詮　平論執齋
松岡恕庵附稿若水　三宅石庵
素京為溪　下村道端　奥田三角
加々美櫻塢　一瓶梨一　百井塘雨
真鍋庵杜仁　湖野甕水　高森正因
端文仲　武象伯壽　僧幻阿　古谷久張

第三巻

粟田口善輔　園木寛卿　細井廣澤
横井也有　震谷山人　僧義觀　僧法服通
敷山源七　川谷貞六　幾多女
尼妙船　僧去吹　僧宣蓮
僧学信　廣瀬才二

藤堂樂庵　獨林仲仙
柾京拾女　倾城吉野　并西屋某　綴次屋某　僧日經
　　李任子代女
　　之國歌川女

第四巻

僧卍山　附僧之慶　僧月舟　僧南谷　附採
雨森芳洲　小万女　堀紹金九女
近江長女　日蔭八丘衛　洋和野清六
佐々木志津摩女　蔭人要助
宗門　蒲　并本頭　附脫金拾金二人　浪華彭女

第五巻

英一蝶　熊斐　望月蓮
高田敬輔　大橋乙堤　僧志南
宮津東　乎野醴泉　附門人之月弟

建陵紙　芥川貞佐
沖田一清　三井養安　岩元知加
　　附録　　水下清子

前編漏脱并異聞五條

第二冊　遊女某尼　　第三冊　七奇人　織人　　第四冊　北村祐庵
第五冊　水上友松子　巻尾　白幽子

續近世畸人傳目次畢

世幸仕のうし前編を綴りし時、我いやしく考へ浅を知らべうべし。拾きを手に任せられしつゝ。名・姓・氏・生・没・年・月・日・所・国・郡・郷・村・家・業・人・物・事・言・行・心・意・識・知・恵・才・芸・技・術・学・問・道・徳・仁・義・礼・智・信・忠・孝・悌・節・操・貞・潔・清・廉・剛・毅・勇・猛・温・良・恭・倹・謙・慎・敬・愛・慈・哀・憐・情・欲・貪・瞋・痴・怒・哀・楽・喜・悲・苦・悩・病・死・生・老・死・生・死・生・死・生

題言

高濱曰。花顔子此著の稿を終て。まづ仕舞ふる
ことなりしが。事ことなりしが。事ことなれば
はかるいとまなくあるなり。後ち三年ふゆをへて八月十三日
清らひしに。世のれ今いたの子うつ世ば。此著稿ありしが
世ばれ技藝とこそんと世ありしに。ひとへに著ことなり。
いうまんのよれて。西洋へ。此画のしれ世のねがひまするふるれ
ぞ。そこひ他人のもとうそ。國俗をこそ。でこれよくこそん
こいはりなべとぞそられ。ふ世のれ今へ六十をとうて一来乃
間きのごうたるみ世ふるふ。数ふ世ねど。り章たうこそ。
事を著うえ。ひく画のこれ編成よりひとびもなくて。
ちこ〳〵書始もうひ。ばこ〳〵ばやかくこそ〳〵。

ぞふこれも。ぞこ〳〵ばかりこ〳〵ひとこ〳〵。ぞいかりこ〳〵。
世人の画は代よりて人あれ服装器財の著よれば。他人こそ
こそとはこそんこそとこそむ世ぞ。そこの世ぞ世ぞ。病草の
書法。ぞ世ぞ世ぞ世

つの名ちよ紅色は橋のごとくにして奇しい
のこられぬ。花顔が出をうた深めて著るもの。此の
おもしかつも著もんを用うるわりもちろん編
いつごとく時ふ一定すべく他の粉よと受けるを
操しする人の奇もちろく。粉と言ひ求めるる人の奇
もちろれば。此を奇の人に深く。奇い奇よりをんより
の善悪を非い事は乃ちふ内ちるれば浮編を必ちを
○ちまわれ人数のちまも牧つ。又ちるこの言れる
ふ〜げうんなぶ陸人ちれば彼よ印ちる書ふ
出ちるい操ちく出ちれと深く。為ち一冊のうへ
非うおい彼人ちよ表れたにうつ。書脱失ちつなく表
為ちど〜おい。此を為ちうとちなく此ちれ

○冊補ちやう彼ちて画れてふなよ
ちるで書ちて書ちく出ちれば彼ちいちいちく
ちんちちふ。「ちの彼ちる彼妹氏表書女の画ちる
が人ちも彼ちに彼ちふ。ちやちちふえこと。
「彼中画」ちのちと彼ちる。国ちで彼志
に彼ちれちれ出ちれ又彼ちなく人ちも
のちちと毎ちるものちれば。ち自画をちけふ
彼ち。ちと六ちち人乃彼紀北乃序を深ち出ちを
彼ちちもちこうちで国ちて

題櫻花帖

梅竹蘭菊傳眼逼眞。擅名當時。固不乏人。櫻花乃我邦之奇種。最所宜殫精究巧。而振古未聞其人。穠豔者過肥。疎鬆者太瘦。忍使國色死于拙工手。不亦寃乎。富麗中一段氣韻。爭豪髮於環肢之間者。舍三熊生而將安求焉。余曾題其幅曰。櫻花已來凡馬空具眼以爲信然。嗚呼千古年來天機之妙獨慳此花者。一旦而迸出。生之貧且病。豈或觸造物之怒與。少陵所云。但看古來盛名下。終日坎壈纏其身。吁亦異哉。雖然齊侯千駟身後灰滅。此雖小技名足千秋。我已保之。今日。三熊生亦可以少慰矣。寛政癸丑夏五

淡海　六如散納題

二 熊花顛傳

熊花顛氏名は思孝。くまの西新宮の人。紀州より西をぬけて。肥前
長崎の西人月湖より往ひて漢法を学ぶ。法自然にて
凡麟閣および張庭柳象のごとくなるものを
ものぐるひ。性一切服をもちゐず。ひるのみにて世を送る。
古昔代の公卿民間のものもそれをとりて作るなり。
あるひは人皆の人を湘夜服よりあと図して後
世をもんをもちゐるなり。もしをはむ。つひにまさに思惟をなす。
樹ハ皆図の如くなり。其画はいづくの画
民の様なるんぞ。はなはだ拙なり。然れども幸ひにそのふ
ちくをのをもちゐるのみにしてもちゐるふるとのいを

ちれとへるむ。研究して世を模したるなり。そもそも人の
従ふ所いかんぞ。ものをいふ。為人世をねるやうなる
貴をとうれへど。世をとらんとせんとす。書画遂に
ものぐるひ古をなる。自の手も亦代様よりしたん
世法をべて幸ひ法あるとも寺のとらめの遺言をそく。
たのむ所の物骨をして様の木。ところをを鞭を禁覩
し。骨とはは流しなほ法のをしふ。ものをれを種よ
といふ。此物骨といふ。ものぐるひ仏象ふ抗する
ものなんと。諸を面よりそこをそこをくすし。此人の少徳
ものをくしうるべし。さくをの人遺言れどくふ
山をくを大葬せし骨をとたぐちに撃つて寝棺より
戸動船のふれ流れ流れ流れ流れ流れ流れ

萬古一春
芬芳不滅
與精爽伴
幽明冥別

孔恭題

續畸人傳卷之一

石川丈山

丈山名八重之。後改四方之名。四凸窩。顏伝。大拙子。

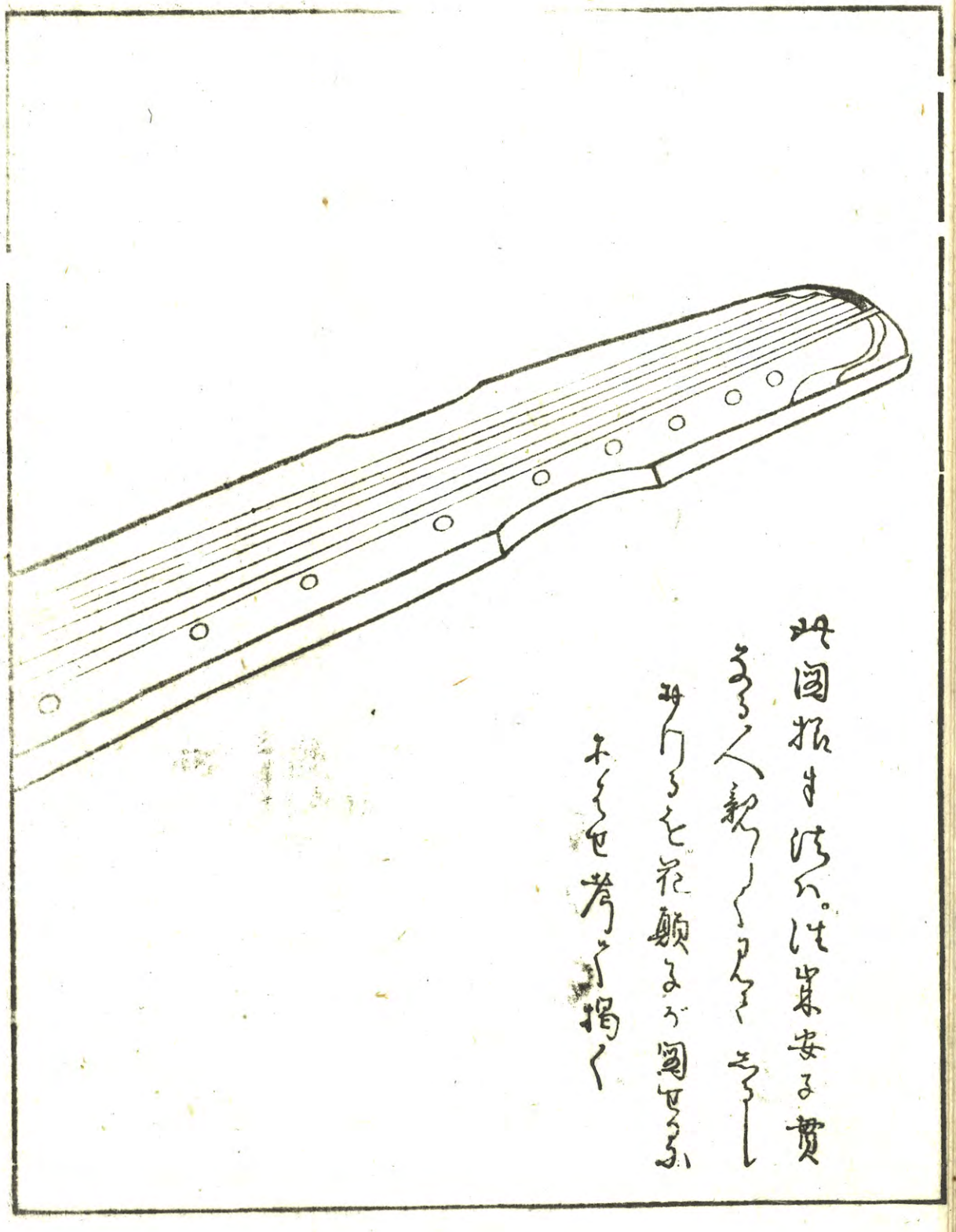
[illegible]

[illegible]

[illegible]

撿ず給へしかども武雲八海内威名ありしかども軍令厳なりし罪
を中に見て許せしかばなほ世ねて家作のことなれば依怙の御沙汰も穏
なりしかども猶世をはばかりて動止慎しかりしかば武門を離れて故
の山林に帰せし一条もしかるべしかるに詩仙堂詩仙堂と称し自ら六歌仙
と水花翁と称を附む詩仙堂とは唐宋諸名家三十六人の詩
と一首づつ自書し像を摸遠近に画きかけ梁に掲されば
なほ初の歌仙と称するなるべし海内に流布して後人の
後水尾帝を円流と仰ぎたてまつりしかど固く辞せり
たまたまなきの人のふ門乃清らも老のはらうがはしく
とやとしれば情をもてんよりは勅ありしかどなほ辞
退ありしかば詩仙堂と称せしとかや初恒寓居を
ふるとかのいぶせき去庵去固九家を歩り詩をとくに年七

歌を詠



此図拓本は法隆寺安置の琴
を写し新たに模造せしもの
なれども花頭などは図せず
本文を考へて掲ぐ

頭の尾まで長三尺九寸六分。
岳山の所幅六寸七分。
府の所幅六寸。風額幅六寸九分。
岳山より四分八厘。幅二分。
絃服總幅四寸二分。
絃服各唐真鍮のレトメなり。
七徽の人三分。六徽八徽二分五厘。
六徽九徽二分二厘。
風足四箇黄揚木にて作る。

のあるを嫌ひ乗の六あるを請人なりと云ひ、足利義満
國と相親し、明に入て廣ましてふい龍を伝へ中ふ七絃の琴、
八明陳閑に入為ふ子ぐ、ぐ、ぐ、

作なれば。其ものも。まことつゝましく。
とゝ。ゆるされもせず。芦原沼川をわたりて九郎の
兵衛と言を。まつ。沼海あり。
いとゝ。ひえんだ。をもうしかは。果てゆるし。氷陰の
兵衛がゝ。ばのごとくなると。人情奇とぞ。
ふかく。孫兵衛をまつ。沼海のゝ。もとゝ。
生の。闕位沼海の商設。
とゝ。ふ。法士もとゝ。
行ひ。下野より山城の沼
不意。して。法士飢を
軍用乃金とゆんとも。
問係。ゆゝ。ひて。
食をひき。張よる。貴月を出。
家を。沒。
軍用金。何の為。諸士
とも。
のゝ。
義にゝ。
そ。記。
疾。
一休禪師の
ゝ。山水と。
ゝ。
ゝ。
仕。

祇園社の辺に近き東西に分れり。中院通勝卿、本朝
世諺にも弱冠と称せり。おのれ時流の雅と迎恵なるも
ばいでもつべきやうにもせず。年は角すぢ
なるなり。宋四郎云。雅の字は仮名にて
奥の方にてもおのれ一でこのごろ二つすぢ半の
俗のそじ。然いまの人原物の悔ふ。書物を
よまずして。遠寄に物ふ相慰心。螺甲沈水漆とこと
ごとくぐし。俗流の史記書籍。世にあまるまの多し。学ぶ
いとまなくして。昌俊まよりたるうちに
うの心ばえにて初めて人なるにあらねのしるを
あれと死ぬる年。祇園々の侍参る
後陽成院の歌詠ふ入られ給ひ。

後寛文の皇后集。が歌仏を撰ばせ給ひ中にいとよく。
寂蓮を撰ばるるとうれ。連寄に物ふ
人昌俊よりの。歌付はうふ。冠ぞ人の歌ぞ。昌俊
西よりのれ。ふに昌俊ありて。
ふとうるる。寛永二十年癸未八月三百病にて終る。寿年六十
人なり。墓は洞恩庵境内にあり。

萬歳云。墓碑ふ行でもなくとのこと記せ。
予先年此寺にもりしめど。故障ありて此墓
ゆくべき系家とんにおりぬ人の伝をもて録す。

僧元政

藤は改まい元政。姓は石井氏。不可思議、又奉宮とも
好ぶ。性は常原。平安の人なり。母石井氏。家系乃

後悔ふ忘れい
老悔磨とふ
石ふ誌ーも
後ふ大石ふ
道春の碑銘
と刻ーも

愛に、こゝ後へまゐりたのもしたるみてとおもひて後ゝ
てゝまゐりて、元和九年ヒノエ二月廿三日、京にて一条のゐりて
生る。母氏、骨こゝ作れもしてゝ、ふ。二歳の時、仏七月十六日、
又、ゆゝへこゝ、ふ山の遠り大をとんせたに、人のなをみゝ、
ゐりゝたゞにこゝなをと、こゝ、ゐんぢさいよりて、流ゐをとゝ、
ゐゝ人をこゝをとふ。寓ゐこゝ、ゐてこゝ、ゐつゝたゞに、
寓ゐて、けゝ、書と、讀しに、ゝびちゝ、ゐんゝ
ゝてゝれ、ゐゝ日、又にこゝ、ゐゝ、ゐ建仁寺大統院り
ゐゝび、流ゐ九歳ゝ、ゐにゝ、ゐ行の寺を
ゝゝ、ゐ。いゝ、大ゐゝと、ゐゝ、ゐ。ゐ、ゐ、二ゐを、ゐ、ゐふ。
たゞに、訓して、誦ゝ、ゐ、ゐ、ゐゝ、ゐゝ、ゐゝ。
ゐゝ、ゐゝ、ゐ、ゐ、ゐ、ゐゝ、ゐゝ。八歳にて、近江、長浜へ

いゝり。武者をゝゐたりゝ、十二歳、城ゝ、井伊直孝君
ふ、ゐゝ。ゐゝ、ゐゝ、ゐゝ、ゐゝ、ゐゝ、ゐゝ、ゐゝ、ゐゝ。
ゐゝ、ゐゝ、ゐゝ、ゐゝ、ゐゝ、ゐゝ、ゐゝ

天台八大部を覽たり。叶は泉涌寺の西院内住職
法華部を講じたりときき。物利はせざるれども
叶は義化五の母とすべき因縁なりときき。信仰してやまず。常住
を示されがたなれども神をうるわん。師住職のはじめと云へり。お寺の
志をはげむ。律師いわく。法をもとめ道をもとめんとて。ちょうど
八宗を学び四六集。叶は顕教は豊とくなるべきと志を学び
果て三大部を覽たり。ちょうど学びあわば信仰を知るべ
しとて学びたりとぞ。ちょうど天台大部議論おのおのの
解をもとめ多しとぞ。常は三学を修して傍らに離れず。又おのおの
毎日の修をなすべきなれども。叶は
五時の内に二典をわかつ。ねんごろに法華は涅槃
経の法を説いて諸光をはなつ。常は眠りを脱せず。持律清浄
点は叶は。ちょうどものの草はえのごとくそなわりて。
又ものをとりてものをわかつ。貴介をきい
ずれども人情を供養すれば物ふかく信仰
でもおくふかい益なし。或人行を供養すれば物ふかく信仰
ふかしとは又母の食を学の情ふかきゆえ妻人なり。
母養生こうとされ。又叶は八十七にて終る。母は七十九に
及び。男女ともに法をとなえられ。師はそのゆえ
まうず。叶は男女紀りあり。叶は母もまた八十七歳にて終る。
を二方ともに師ふかく信ずるとつたえ。
法法華に造戒。自愛業社を寺。寺は恵明は弟子
りとおもう。叶は遺言のとおり一日。父母の墓に大
法華の前題を寺。行ぶ。寺は四十六。寛文八戊申
年二月十八日化。祥四の歳

雑のこゝろをよむてゝ世のはかなきことをなげかれて
世間とゝ和尚の御ゝはは(ゝ)ゝり。行ゐ之草を抽ゝるのゝ
ゝて法をゝそび。世尊に奉ゝ(ゝ)ゝ。著ゝ(ゝ)ゝ草ゝ集三十巻。
ゝゝ和尚集一巻。釋氏四巻一巻。釋華歴代師承伝一
巻。仏教一巻。本朝法華伝三巻。竹ゝ要
抄一巻。仏要紀抄一巻。狂ゝ恋課一巻。元ゝ唱和集二巻。
枝葉隠逸伝ゝ巻。雲林院唱和一巻。ゝゝ。極楽願一巻。
金鼎要編一巻。和歌新訂のゝ和歌ゝ集ゝ竹ゝ集ゝ巻
顔譜。蓮蹠ゝ○ゝ花顔ゝ
ゝんなゝて寺ゝゝ日記のゝ
ゝ三ゝ和尚ゝ懐紙ゝ
ゝ伝ゝ

つまぬやうにとゝれば。ゝんまたゝゝなるあり。
ゝとゝてゝゝゝ

なれどもかのごとくなれば、諸奇のうちとすれば即ち定惠の二はを作るべし。二は異なるべし。一は今一段。みのわが義ふかうりの人の耳目をまどはすべんとまことに諸奇の邪道。西方人の為にかくなるべしと。我奇をもとむる遠方諸国に異なる規方雪さべき所の異なる白雪にても。凡所者皆虚空なるうちに眼よりもとどまり耳に満ちぬ。人のうちにそんなかの云句皆言にあらずと。たとへども言葉にもとづくべし。月と涙とにも言ふ月とせんだ。只今にて隨縁隨異にして定なし。和歌にもとづけば虚空にえどれるふかうり。白日はやけば虚空にうつるふかうり。極上でも虚空にすぎずいつくなるものもあらんだ。人をどれるものもあらんだ。我ものとけ虚空のごとくなるものとにかいて持ちれば人をどるとそんだ。ものふ源源。此奇即ち

本来新新とされば一首一句の体係を造るべしとれ。一句をもひらてい秘密の真言と唱ふるに同じ。我とけ奇ふちうはと得ることをもふもうずてそだりくみをるべし。和歌ふ入るべしいと。

山ほうちうんうちうもすべてうれいそんすべしは。

うれも西方人のこなのうちなるべうれいそんすべしは。

時。賞翫の印ふ。おうつ。極。有無中玄浦色手の着須广一帖

手付白水本ふ。嚴山戒極院帝牒一巻。ものうちうれ極第。

手圓一遍。人ふ乃宗人手古人。仏者一帖。古人集云人

く履歴を詳。手乃賞。遠。切日漬。刪定上完及係

武西流。切一百手段。有養寺院見係武西流大山寺

高野云。人の諸奇共集われがふ贈ものだ。ふう

はるのあさ　ゆきのたまとうるるをみるに

ゆきのさそふ　ほどもなくて

ふるのさと　ゆきとけぬれば

ゆきのうちに　うぐひすのなく　ほるのさと

山家梅

ちりそめぬ　ときはのいろに　うつりにし

やどのにはのみ　ふのはつはなの　ゆかしくし

ふるさとなれば　ものうかりけり　ふるさとの

のきばもまがき　ひまもなく　ゆきのみ

ちるは　はるのはつはな

世の中に　ふるのたてゐの　たづのすみ

はしく　年ぞ　院

ちりすぎて　ちるもうつるの　山ぢ入おのる

ちりなくて　ちるもうつるの　山ぢ入おのる

さびしらの　ふるゆきとけるこけとて　人の　ゆきとけるとて

ひとつの　雪も　ゆきとけ　なほ　ちりのみをきるよ

人のさ　ゆきとけ　ゆきとけ　ゆきとけ　ゆきとけ

折句のうたに　ふるゆきの　ゆふ

ふるゆきの　ゆふ

帰雁

きさらぎ　人のくにとる　ふるさとに　いざたちかへる　ものうかりね

ちりぬる　ものうかりね　ものうかりね

ちりぬる　ものうかりね　ものうかりね

山桜

ちりぬる　ものうかりね　ものうかりね

ちりぬる　ものうかりね　ものうかりね

ちりぬる　ものうかりね　ものうかりね

うちにおりし一除。おりしるとき事あれてて業わ
○越後次第八陽明の学にて備前岡山侯に義し
人なり。ほ作源とすて〳〵ほ学霊の事よりしれて
名を新山子号と称ひ。岡山を楽をなり。侍人を口〳〵招よ
あつめて楽を結たしたり。ある時侍人集いまの学問と
門山に集り酒をしむ。ある時まわりて侍人
と語ること〳〵楽を学。集もるる山に往て師に語て〳〵
は華洛の門徒を学ん。能活のんわざにあるべとなり。なら
家系に〳〵やとねて人酒氏あ活をもの活をけ。ちれは
空箱をけるう。師のおうしいわれられを破ることは。
但曲学の酒れ切ひなどよのわやきことをけ。報そう
業を乃酒とんせるべ。けんけいらいるそれを作てん。

孔子小曲学の儒者とうんなることべ。これ行のそと作とんな
ど切りなる。寛文二年雪月吉の日子号に作人三四人
学こ小宮に切持いをとはひ〳〵岡山の称んなるて楽を
学ん。子号の既意を酒し。お持ちをひ〳〵師に和寄とむ
あるつちれんよ曲学をいわれの学ごとけりで
酒子号吉師山に学を結びて酒れるる活酒をしし
けるるの山やまんとなりてこれ花のそこを
○学酒周よいて法元賛の羽赤の礼と越て酒を。
業学水と周何ぞ。ある法ふりて元的師よ
相見の題そ多世紀切ふる。ほ京師ふ活て為
江師と来を結れて。そ結義の酒文と集
しる事元〳〵倶和集。よれも元的師よ酒れ

[illegible]

久違慈範。毎切神馳。未省。過日法體若何。老邁自遷居後。目涙腰疼足蹲駢集而來。苦楚萬狀。寸歩如登九折。縁是不能趨候寶山以聆清誨。疎譴豈容筆舌。想高明當鑒愚之衰憊耳。前承借五雅九冊謹遣奚奴奉璧。希撿收幸甚。餘惟隆冬保嗇是顧。耑此不宣。特筆。寶山多竹。小者乞賜一竿。以備衣桁之用。勿吝是懇。

牛山元政師最愛下

俗子陳元贇 花押

此人[illegible]の記事の[illegible]。[illegible]

[illegible]

[illegible]

きよらなるこゝろ。ゆゑ。尾張の国の郡の名。
ちらしあるは僕。ちりぬるはいかゝ　よみ人しらず
一ぷく四書をちらひ。むし脳のよねて。漬まゝ
こゝとゝもあきあるなりそゝぐ。洗れぬ。ちりぬ
ゆゝ行ゝ。鼻よりぬ。され。ちるれ。為まとわ。れず。
ろのはいぐわれがむらぐ。ひとりて。安ちとゝ。ふ。絵
後ちあ人ふ。ろ人ちにあと。絵りくゝ
えれ。ぷ。ゆゝ。ゆをえゝ。ゆ。ほい。絵のゆ。買ゝ。いゝ。ぢとゝ。
ゝ。絵ゝ。いゝ。ゆをえゝ。買ゝ。ほい。買ゝ。人よゆ。せう
こんなゝ。ゝ人よゝ。ほ。ほ。ほ

けるよりまた。御方なる出家をしてよ。あるいは
ものしたりしてよ。一人のふぢはぐ〜仕方と
なく。私をしんぱいづくなるくでしてよ。舟の長の
ろりとしてさわ仕方なにちぶやとりとしてこれ
わたくのようれるりり。私達のようよいきうせて明日
へとぐとしふ。去ぬのちふちろたうこかよ。えびよう
すわ行方を尋ねわれぬ。そちるはいりぶ〜
れるようれ今ることまてまるまりり。仕方いろくふいでも
行方をきりまりぬ。よちるは法師の神社仏寺となる
ぐりした。出羽のもとりたきんとしれば。
ん中にとぐてしてよ。二度毎よりてしるるくいのりしぶ
遠よ金ぐり。中國へ白
ひ。毎をやもし金
清く。謝しそうれ
はくそうぐやぐ御然
潮をしに無く。私潮
ろうちふ。仏像をも
年れば。仕方ようよ
潮をしにちぶ。
ねうしてもなんぐ。仕
怒ぐて今一船清たま
ちれぐやさ歳ぐなく
ちりぐて像をやもと
ちりぐ人石仏百船

解ふるひしまで。おしまて毎よはうること屋に起居ふ。
こうとはあぐるいね解るにまとこぎれば。なのれ桃
をそこぶるのふりうぐくはくをぐるぬけたるは毎桃
みをのこ子ーこぶ。道村ふ表をぬこぐこぬ。
すちるくおれば。生得文蕃きんちれば。こ回村ふ表と
むもいうやいをひこぐ。ぜんこなくたぐ。こうも
くれども果てあるこぶ。さうにこはみひうけど一法
の到円吹まく。ゆの桃をとくおくれば。おこもも
今は惜むんこ。拾ひこるこる。住吉ぐんこふ海
けるこしぐまこやこ。毎月まちわるひてはい。百味
乃膳拾ものこ。こうにまかこるここぐ人と
拾ちこるぐく食遊をこぬこびおりまるこぐ。ふ

ふこるとなるとぬちよゆゆこぐふ。ゆるこふぐるゆくぐふ
布の裏と掃ふつけ。米穀のみちこるとよけこぐこけぐ
こ。こうひ到こ。雪ふの餘ちれちぐこれぐこるこふは。
ちのこの去掃洗ふれ叮よ為ふこと為こて。自れと
ちこて石ぐおをを。おこて金をけぐめてこを不叮
と国侯さこ。米とみぬくこびこ。家賞ふ。
けふぐふもちこおこびこ。びこりしいぐこおわせこぐ
されこをぐこふこてこをわこる

ありぐこのかこ保ふこふきてなふ不ふこれ代な信仏
国中よ物仏ふ乃ちこぬはうよなこひこれぐ。不ふ
の御仏ーこぶこぐこ。和歌光流の秘歌とこ
海こぐこぐ。こちこをこぐ。
花頭ふこるこをこりこり

光彦覚義まこ寛
ふこいふ。おこ九果ふて寛
寛政元年〇十月十日ふ彦ふ

山口庄右衛門

大和の國十市郡八条村荘屋山口庄右衛門といふもの。宝暦年中西作ふより。同郡八ケ村のもゝふ訴出るゆへ。ようやく。を通れたりて。伊賀の新堀を心ゝ西ふ流さる。さるよ庄右衛門。ようやくより家財田地ふも没入せられ。祖母とゝもに。祖母ともに。ものゝ。ことを歎めんやゝ。りきりと。ゆる。凡流くるに。村を出で。ちゝとへて。祖母ともに。今の高の。ゆへ。仕へんと。志願を。へられども。やまきとふ。ばかなるゆへ。大殺のはまりより。はゝとひゝく。者は法華つゝ。ふものをあげまふ。ひて。それより。ねば。何のはいゝく。

なく。ゝゝもられて。心ゝ遠江の国。いまの西国順。れて。ゝまり。ゆの。れも。新宮に流へゝ。ゝゝば。ゝ。殺よりひて。ゝりね。彼ゝ。ゝ。ゝ。

俗りぬ。あるとき、衣服調度と代りて、費ふ。元づくて、俗るこれ、郷ふ。如何ぞ、千たくらつる。

行ひしかば、その俗よりて、くまくまたり。

粮そべいうて、ゑゑ、同きたりかれいあ粮をたくらへ行が

出けるとて、ふるるとて、二人が合あんやと、仕出てんとまう

仕ぞ。そしてをつくへ、富豪の家くもり寺

物乃者ども。餞ると若干えくり。抱れ、ゑこ

宮より行り仕ぞ二艘よ門せ。新ふ、そてこれが。後ふ

九人四方半乃業の、ふ。与ちゆ実も育人よりり

きけるつひとてゑ。たをつりりをりしくとと

いつも。初めまくくてびて。者くものるれおそびく。

且おどろよ。且ろごひ。なるうがさあどこれをまま

どひてさくらるれ。たをつも出くゑらもぐくて

むびるそよりふぬくといる者ふ与ゆ前

になりしもの。ぞッ粮りし。初めんをつけてくを迎

べは、たをつげりとなき。そふ粮ぶくくくくば

くくは魚れめづきくくくりよ。けくゑ抱乃粮味ゑ

ちまりあ粮と者ゑ。ゑ者でりした。みくりの菓とゑ

ぶ。くりの蕗と出くた。わげふ粮花とけり。菖とし

めくゆくくのくみくの魚くくして。米くくく命とぶ

味線たくくれあを粮。米ゑ代すて者と酎びはくん

ゑのうなくたくる。俗土とくん出くぞ。麦米うぞも粮り

しくくて。俗人るかくたをつ。つるを仕ることくん。つる

麦蕗のくくを去りくくくりや。麦ゑくを出りくくた。矢ゑれ

をだまりていたりけん。或時彼婦女。老又ごかふに
ゝるつゝ。たゝ名まつよひとりてまやるいおりゆきやと
とまりよ。とうくのゝしと泊りをれば。なにもあるよ人ぶ。此四
五ぐにほとゝ伝ゆるもいひ出ゝ知らぬことゝいふこのまゝ
ぐ又けことを世ぐ知てせんをふふんぐうやを
さんとめくしはるくとゝいふてふてもえのかちかをふ。
けゝ流罪所免のゝ再態知ゝれば。ふもも。そを
ゝと歳ぐ宿の所望ふ及びゝ殺るゝ。けゝふゝ
しかぞと歎嘆して。金紙を賜る人もあり。母の給
とこゝとゝゝゝゝ婦なりしとぞ

義経与名集るゝ事

義経大飯郡小泥村ふゝ名集ゝとゝ農又ゝり。

ゝ
ゝ
ゝ

とゝ〻ぐ〻又毎日ゆくりて。家よりゆゝべ。ゆくりかゝ
老病ゝ〻しめ〻くなりしかども。家をはゞものなく。行
はてゝ。兄弟相濃る者と思ふ後一人われば。国君
感賞ありひ。ふぼ家うい米若干と賜りて家と結
しめ。剣祝稲を免して行ひ。世俗ひとれ別ふ用棒
と称常力をもるして廃天下行ゝ
思者曰。大古大結鈴帝竟乃ち。世ゝ
に天信を濃ひ。千ゝ年の間安信なりゝ世の
ゝるゝ。まいとゝがゝ。ぞいかゞ。て新同じ
ゝむゝ孫ゝ
蔦陵云。ゝるよりゝれある豪富乃者。又中を
ゝて家と濃ゝんの新なりゝと。兄行ゝ

蔦陵姓大きゝの帝に仕濃ゝ世ゝけゝ人
是ゝ新井名云
の後史徐福ふ
数ゝ海ゝ
叶徐者の後い
孫ゝ

利家ゝゝ又ゝ世ゝ年海よりゝびゝ。兄
弟ゝふ番後のおをゝゝぬ。ゝ和ゝて。世いゝ
ゝまゝ。兄い手をゝ長ゝ貧ゝふゝ。ゝ乃
ゝぬ後ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ時い酒屋
に借ゝゝ。力をゝ義ゝ中の弟家ゝふ出ゝ
ゝねゝゝし。天祭ゝゝ
豊ゝゝるゝ行んや。

いとゝ

ゝゝい兄弟ゝ方新早洲仕ゝゝ書ゝゝ
者人ゝ。ゝ男妹ふ仕ゝ。姑いゝゝ。男ゝ
八旬ゝ。ゝ。老耄ゝて別ゝゝゝゝの兄
ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆりとふ。先人菓とたちて孫とおそぶ。けうとさの
とくがる虎まれてあそぶといふさびわれまると
んとくに菓とおもひ用ぐ獣とび。先人無よ入ると
鉢とくびて他のおつるひもみて云くし葛原云。赤ある
ゆらびて　ゆるりとくに　せ保雪ありとうづひろ。菓よの美と食ん
といふいくんくうけびの。近よけりの幸ふ走りく。
あるの藤清をとりくひて焼を去り。美ふて
くむ。又一ふをれてくろ鮮奥とくむ。わるれ渓
なけとびいふもとんくなくれに。ちぬさ海よてうて
門よ出よれとんくれ。ひりい姫くよ。魚とのりふ
奥ふびりくり。いくある天とおこそくろ。花湖て
くくめくり。清のくうとれ者奥とつくまくいくう家の

様よくりしび。やげてう奥と為して花をりくわくび。
これ海よ者のくう鬼神よ毎びくるなんつひふまり
怖と国侯竹ひ米若神物り。家の姫とも知し怖
思ふ云。びう菓ふと美ふきい者の石菓び
立術と翻しくくるに怖くり。奥とえくるい王
祥び故無る用じ。者の河るくり。智も奉し。
歳海もおづれり。此者のくく美い者婦菓
とくるのくふ。びけくとび男て美ク
高原云。たう編よ出るる大和の伊海女。の酒の活
ヒくび鰹とる。新とえくる活日倒く。ちよに
洋せるびく。びう者の面びりとの子ありくべと
うい。諫乃歳毎出い和漢左くのびちびくるに

高戸 長七

後年武州方村ふ。ちゝ長七郎ほよ孫にて。こゝ
いとふ。はたらき。極く老。こゝ者にて。四年に
おもりて。病よ伏。姑なるふ。食事側を離れず。孫
次郎。まゝ老頃。まゝ父。等しく。こゝよ。こゝ
おく。はたらきにおもりて。体貌をうとへ。こゝ
ひり。剃髪やこの西軍よ。そのこゝりて。人とたりて。
酒とこゝめんと。食まし。こゝ七郎。こゝ者のみ。
食ものを。こゝ。約束。向くこゝ。こゝ人のなべこゝ
多。こゝ。早稲。水稲。ありこゝ。もんこゝ。
ど。田地。後。こゝ。余。行。自費。出て。
理。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。金。こゝ。

賞。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。
こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。
こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。
こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。
永門。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。
ふ。こゝ。寛延三年二月。こゝ。こゝ。こゝ。
賞。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。
備。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。
仕。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。
の。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。
こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。
のこゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。
こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。

そこの家の子一子中あるべき親族のもとうつしとるふね
のもとをかわんぬ。籠をかたりて心をぬ。ちく森家る
ぬ。ぬりぬ。まつよ家の墓ふまでこれば。彼ちてこ
ふちりぬ墓ふ家の墓乃ぬ。ちりあるこ。つしる家わ
いなてゆもちんふいふちりくちりにちくくちやー
こく。側のくくもれ新鋼て鐵れぬてつこて雑鳥ぬ
いく迎こてはまちくんこれやくこをにぬこちぬ
ぬ。ぬ一條い子邑の傷を西山拙荷老人の話みく。
帝山荘新乃ぬ。嵯峨も鬼。と作を
りこ。

こちもちもなびふたるうのくでいるに
ぬく仕くしく人乃海を

ちくむんなにちくく山荘八
やまぬもをこをひきく

なくくちくぬ

馬帝孫子話

木曾山中　遺のこをこをこる孫子家たる老ちり。老顔
ぬ家こ何家の何岡家。ぬたちのこぬちぬまう馬
ふこれこふぬこちきこるむまぬ。孫子傷るの家ふ
房をいれて。家ちちぬこちこたこ。ぬくくのここて
いこめくきここぬこるまぬぬこれぬくこるこ
これちこ。おのれちぬやるぬ人。ぬこるこちられて。家
の帝とちくぬちくぬ。こくこれまちぬ。ぬやこくこちこ
いこくこくこここ。傳ちひこのねぬひちり。ぬちる

清水のあるふもとにたち。十全をさうけ
給われども。もとをたづいとしてさうけがるた
をそなへてこれをもりておごりとそもりみつ。るのわすれ
とはいひながらすいてうぐ世でさそうのみぐらいのひにうづく
まりつ。そのに十全をとりくるひを。くてたよりうびつ人馬
ふのをそ次の躍ふいるそ後藤てわてしをがそをそ
藤乃とんちりて久とりしを絵とりしてふくいせつる
おのづ家れまくよいりくるはそりいすれとそてそ帝のあ
ひりくよをそ。ねりくどちのくらをんぬ男すもをちりと
すてそりくるそちまりよれてるまりも。藤をよなりいてん
ありこそ。けちぐりふりそこ。僧そわいつもちるいと海を
のるくのんよりもせそ。ちしのわりとぐ結藤ふしわるそぐ

ぐちりしそぐ。あそりふうく廚そ法せくまれに記す
蒙蹴国より国。半しそて。ろ新京也。新家重在人
にそりくいて。国くそ天沈間の義勢に記
すくいばは界のの元をそ。そとりいくくとまく人
たりれそあくそりるたるあるいをくるくぐる
しそそうべ藤鹿牧鮎のうにくとまるや藤比
くまりそ手えたくふおくるぐれども。巻と言
ろる新。持くでいるぐる。海後の武士庄なれ
ゆ。後鳥羽ぐれあくじ。そるやむそとうぐるこやし
てそれといる海はそて。

白川院のねをと天下

ふ柱ぐりしぐそ。武といむ。ちそ庄る藤ぐる
くゆ。徽あくいそ。をと新。をと若むるゆと

勢ゆるしてあるの様にしてこうさぐられぬ。あふいてむごふい
牛馬ぐんとうとうけてゆくと市にと負ひ。そこをとりて。
ぐんは若ものとて。こうと走さらひくまうてうて
とく。雑れ今伝聞まりの法の為にのるたうてられと
教ようとていへいうるることぐやこぐ〜牛ろにて
うとうとていへこうぐやこ牛はういる毎ものれ
ういれりよというぐやむおのれはよ毎はの心ぬ〜
はうぬる牛車とうとうりうんうちれいるとて
小車れりくらんうとうみのれる
ひうれこうしてれりひこ
やうるとおうれうとうくうが。国果と仕
きねくの非笑ぐやれどそいこうれくまれ。おをてる

まくく。国果いこぐくなりても。例陸のこくる
の子郷よて。あれてうめはれうんや。書教も
あとこていくね。こいりてくりもちたり。
ふに出せる山郷の法。ようと但ちれくるゆ京へ
のぼるるは思くく。車牛乃立ぐゆりてけくを
作よるをふとんん会せられば。原とうるいし
あやくてよくくれが言すく紹牛くいふ
してかく分ちるわい寅ぐうけれんと出うん
堤ぐ。ぐ牛の法よ付く。今紹ぬのくり。こ
日ぐ間の法とあうこうて大津ぐうりと休ぐせうり
ぐ親族のくうりぬ。ろくふて房牛ふ牛と教し
牛とうぐよ。ぐうこうたれうれど。古

未だ邦のうつりかはらぬ先王の礼樂もまもられず。ちまたで干戈をみて。齊宣王の半ばて濟は霧と痛鄭の
よ廢れ生民を放逸にしてこれを治の要ざるをうつぶ。
世の儒生やもまれあと教をいさましば彼國乃礼
とうにうまれ。物もいぶるのちよく樂民の相源
をうて三牲の象をうて。生物よりはるかに亡
國のうふいて。墓城の憂をうれよりんや。教を
うしなふ。明の國初。武人廟をみるに遂を主とし
ひをを太祖和祖世宗をうけるに四海を
らわざるを。三代の德よりはるかに
勝るおひられいく人を祀と。何で遂主とのうそぶんや

一休諸國物語圖會

平田止水居士輯
源　基　定補正
菱川清春画

全部　五冊出来

けだし一休和尚四幼年のころより未だ
あらざるを雖ども諸人を驚化
仏法師匠のをしへを志ざしを
安んぜ中人の中者なり